



現状と課題

ア 対象児童

既習内容の定着が不十分である。学習内容の理解が進まず、生徒指導面においても課題がある。

イ 学年全体

第5学年の県平均(国語)6-Aに対して6-B,県平均(算数)5-Aに対して5-Cとなっている。第4学年の教研式学力検査では、評定1の割合が国語・算数ともに約2割となっている。学力下位層の児童は問題の意図が正しくつかめなかったり、自分の言葉で書き表すことなどを苦手としていたりする。

現状と課題をもとにした仮説

ア 対象児童に係る仮説

国語と算数の少人数指導を行うことで一人一人の児童を丁寧に見とることができ、学力下位層の児童の既習内容の定着を図ることができるであろう。新しい学習内容の理解度を深め、学習意欲の高まりと落ち着いた学校生活を送ることができるであろう。算数では問題が解ける喜びを味わわせることで学習活動に楽しみを見いだすことにつながるであろう。国語においては言語活動の充実を図ることで、読み取る力や自分の考えを意欲的に書くことができるであろう。

事業実施報告

- 【通 年】 少人数指導
- 【通 年】 チャレンジタイム
- 【年4回】 学び合い学習の授業研究会
- 5月11日 県学力・学習状況調査
- 5月25日 学び合い学習スタート研修
- 6月15日 児童アンケート
- 7月28日 児童アンケート活用研修
- 9月22日 県学調結果分析
- 11月4日 スクラム事業 授業公開
- 12月13日 標準学力検査(国語・算数)
- 1月下旬 標準学力検査結果の分析

仮説をもとにした取組内容

取組① 「少人数指導」と「学び合い学習」

・算数と国語の「少人数指導」と「学び合い学習」を組み合わせることで、学力下位層児童への「ケア」する機会を増やす。学習形態をペアや4人組とし学習活動を工夫することで、一人も取り残さず、自分から訊ける子供たちを育てる。

・校内研究主題 『みんながわかる みんなでわかる授業の実践 ～授業における教師の関わり方の研究を通して～』に込められた2つの要素は「学習意欲」を高めることと「居心地のよい学級」を築くことにつながっている。



取組② 「朝のチャレンジタイム」8:20～8:35(15分間)

・既習事項の繰り返しにより、基礎・基本の定着を図ることをねらいとする学習プリントを行う。

・国語:火曜日、算数:水曜日

・コバトン問題集やコピー(印刷)可能な問題集、アシストシートなどを活用し、個々の学習段階に応じて内容を変えている。

・担任外の教員も加わり、一人一人の学習内容を把握し指導に役立てている。

取組③ 「各種調査や検査の活用」

・県学調の帳票09、帳票28、帳票40、コバトンのびのびシートを活用し、問題ごとの正答率や学年全体や児童一人一人の学習状況を把握して指導に役立てている

・アンケート(楽しい学校生活を送るためのアンケート)の結果から「学級満足度」と「学習意欲のポイント」を把握し、学級づくりにいかす。

・標準学力検査の結果から、児童一人一人の学力の定着を判断し、一人一人の補足的な指導を行う。

・各学期末等のテストを活用し、理解できていない単元については補習する。

取組④ 「家庭学習の取組」

・各学年ごとの家庭学習ガイドの活用し、児童が家庭学習に取り組めるように指導する。

・自習学習ノート例を配布し、児童が自主学習の際、参考にできるようにする。よく頑張った児童を褒め、学級掲示等で他の児童の参考とさせる。

・「音読・自主学カード」(3年生以上)を活用し、学級担任が児童の進捗状況を把握して、進んでいない児童には声かけを行う。

・学校だより、学級通信等を活用し、保護者に家庭学習への協力をお願いする。





現時点での成果

**成果① 「対象児童の変容:学力の伸び」**

・第4学年の国語の学力の伸びでは、対象児童のうち4名が県平均「3」を上回る伸びを示した。同じく第5学年では、対象児童のうち7名が県平均「2」を上回る伸びを示した。  
 ・学級全体での指導では学習理解が進みにくい学力下位層の児童に対して、個別での指導を重点に置いた少人数指導を展開してきた成果である。問題の意図がつかめなかったり、自分の言葉でどう表現したらよいかわからなかったりする場面等でも教師の支援で学習意欲を維持することが可能となった。

**成果② 「対象児童の変容:学習方略」**

・4学年対象児童の学習方略3つの値が学年平均よりも0.2ポイント程度上回った。また、非認知能力のやりぬく力の値が学年平均よりも0.2ポイント上回った。第5学年対象児童の学習方略では柔軟的方略の値が0.1ポイント伸びた。また、非認知能力の向社会性の値が前年度よりも0.9ポイント伸びた。  
 これは、学び合い学習を進めることで、児童相互の関わり合いがさらに増し、「学習の効果を高めるために子供が意図的に行う行動」についての情報共有が日常的に図られた成果である。

**成果③ 「学年全体の変容」**

・県学調の結果から、主語と述語の理解が不十分な児童が多い傾向にあったが、第4学年で「文の主語と述語を抜き出す」問題の平均正答率において、県平均正答率を7.4ポイント上回った。第5学年では言葉にかかわる「知識・技能」を求められる問題のうち、4つの問題で県平均の正答率を5.0ポイント程上回った。  
 ・校内授業研究会等を通して異学年の情報交換・情報共有を進める中で課題を抱える児童を全職員で把握し、児童が落ち着いて学習に取り組める環境づくりが推進できた。

**成果④「楽しい学校生活を送るためのアンケート」の結果**

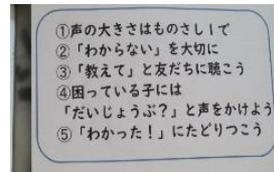
・4、5年の対象児童における学級満足度は学年平均と同等であり、「不満足」と判定された対象児童は1割にとどまった。  
 ・4学年対象児童の学習意欲を示すポイントは学年平均を0.6ポイント上回っている。  
 ・よりよい学級づくりのため、特別活動や道徳の充実を図り、学級会等の掲示や、授業参観(保護者参観)の機会に道徳授業の公開に全校で取り組んできた。

課題及び次年度に向けて

- ・効果的な取組を校内で広め、教員がお互いに授業を見合える関係を構築する。
- ・授業の中で見届けを確実にし、理解不足等の児童をフォローする。
- ・単元の中で基礎・基本の指導を粘り強く繰り返していく。
- ・ICTの活用を取り入れ、学習方法の幅を広げていく。
- ・県学調の帳票やコバトンのびのびシート等を活用しながら児童の苦手としている点を明らかにし、授業改善にいかしていく。



学び合い学習



学び合いのルール



チャレンジタイム

